

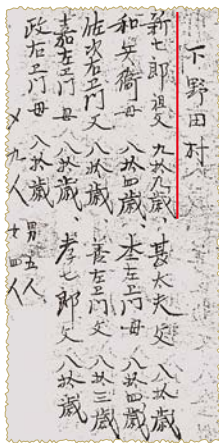
歴史探訪



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

江戸時代のお年寄りの数

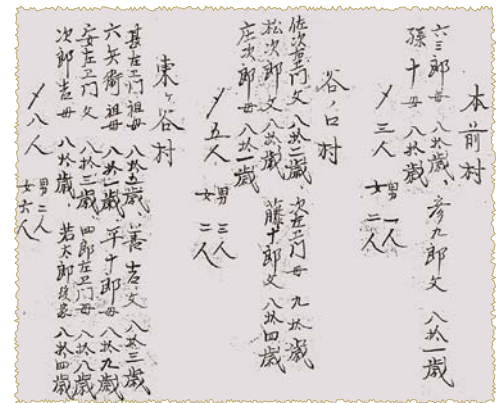
先日、面白い資料を見つけました。それは嘉永6年（1853）に田原藩が調査した80歳以上のお年寄りの人数です。この調べで、田原藩領には270人の80歳以上のお年寄りがいいたことがわかりました。内訳は男118人、女152人です。また85歳以上は86人、90歳以上は9人もいて、最高齢者はなんと99歳の下野田村（現在の野田小学校から東側）の新七郎のおじいさんでした。当時の田原藩は、谷熊、百々を



▲嘉永6年の最高齢者

除いた旧田原町域、旧赤羽根町域、そして和地町と宇津江町の一部で、嘉永5年の人口は、武士を除くと2万2051人でした。昭和40年の田原町（人口2万6871人）の85歳以上は99人です。ほぼ田原藩と同じ区域を示す平成17年（人口4万3828人）の95歳以上は89人で、最高齢者は103歳でした。江戸時代は、今より医療も発達していませんし、栄養事情もそんなに良いとは思えませんので、当時のお年寄りが意外に多かったことに驚かされます。

縄文時代には、赤ちゃんのときに亡くなる場合も多いので、平均寿命は15歳ともいわれます。この調査と同じころ、江戸時代後半の日本の平均寿命は40歳、明治・大正時代も徐々に寿命は延びたものの、50歳を越えたのは戦後の話です。WHOによると、2010年の日本人の平均寿命は男79歳、女86歳となっています。



▲田原藩調「80歳以上長寿者調」(部分)

江戸時代は、農作物の不作や病気など不安定な時代でした。しかし、決して裕福でなくくらしの中でも、お年寄りは家族や地域の中で、温かく見守られ生きていました。お年寄りとは、年を経てさまざまな知識や経験、そして長寿という生命力を秘めた尊敬すべき人のことで、肉体の老いを現すものではありません。われわれが幼いころ学んだ生活の知識は、家族や地域の中でのお年寄りから授かったものばかりです。ある学者は、もともと老人とは社会の中で明確に区別されたものでなく、経済活動からの強制的な退職という近代化が生み出した、人生の段階であると言っています。また皮肉なこと

に、近代教育は老人から経験知や子どもまで奪ってしまったとさえ言っています。老人の社会的な役割が変わったことを嘆いているのです。

田原藩がこの調査を行った理由はわかりませんが、「老人」とは記さず「長寿者」と記したところに、当時のお年寄りに対するまなざしが見えてきます。この記録を見ながら、祖父や祖母のひざの中のぬくもりを思い出すとともに、長寿国日本が抱えるさまざまな社会の問題を考えさせられました。

※当時は数え年なので、生まれた年が1歳で1月1日がくるたび年が加算されます。

(増山)

今月の「表紙」

ある雨上がりの午後。スイレンの花の写真を撮ろうと滝頭公園へ。水面に咲く可憐な姿を見つけ、よろこび勇んで水際に降りていくと、足元に長いひも状の何かが。それはなんと、大きなアオダイショウでした。声にならず、カメラを握り締め、じっと見つめる私。本当にびっくりしました。(O)

【表紙の写真】滝頭上池のスイレン(滝頭公園)